

# 邦楽大会プログラム「杵屋先生 冒頭挨拶文」

## 《翻訳》

インターネットでは、英語の表記が共通語となってしまいました。ネット上で、世界中の写真家が会員になっているphotographのサイトがあるのですが、実は私事です、その会員になってまして、沢山出品しております。その際、写真への説明がいろいろありますが、私が日本名で付けている「タイトルと内容の説明」まで、全て英語で書かなくてはなりません。そこで片言も話せないからブラウザの翻訳に頼ります。すると、コツがありまして、短い文章に変えて簡単な話に要約して訳さなくてはなりません。日本語独特の情緒の出る言葉・言い回しは一切翻訳してくれません。表現したい感情・情緒・風情などの感性がほとんどと言って良いくらい、通じなくて、その言葉の意味を説明した表現になってしまいます。すると、洒落を説明する事と同じで、つまらなくなります。勿論ダジャレは通じません。韻を踏んだ話も通じません。氷雨がアイスレインになってしまいます。「篠突く雨（シノツクアメ）」など論外です。そうして感じたことは、日本語の語彙と表現というのは、微細な感性と情愛と物事を見抜く審美眼までをも必要とするのに対して、「助詞・敬語」などの無い言語は、そうした表現はできない反面、簡潔にして共通して意味を伝えるという能力に長けているのかなということです。

だからこそ、文化の違いが生じているのだと。同時に日本人は、「やばい」ばかり言ってないで、『語彙』を増やして欲しいと強く願うのです。

オーケストラの表現での音量の幅が、ピアノシシシシシモ（本当はそんな表現は無いけど）から、フォルテシシシシモ（同）の広～い強弱のある演奏ですが、邦楽には、そんなに大きな音も出せなければ、小さな小さな音で表現することもとても少ないです。そのppからffまでの振れ幅が洋楽では100あるとすると、邦楽では20くらいにしか比較出来ません。

ホントに幅が狭いのですが、その20にも満たない微細な変化の中で情景を表しています。

勢い、単調に聞こえそうです。そうした微細さは、日本の全ての物に現れ、色なら「友禅紫」や「江戸紫」の様に「色」一つが10にも20にも多彩になります。その感性は、ものの表現にも出ます。文化の豊穡はそうして培われてきました。